

平成27年度第2回入学試験問題

国

語

「始め」の合図があるまでは問題を開いてはいけません。

注 意

- 1 「始め」という合図で始め、「やめ」という合図で、すぐに鉛筆をおきなさい。
- 2 問題は2ページから7ページまでです。
- 3 解答用紙は問題冊子には含まれています。
- 4 初めに、解答用紙に受験番号・座席番号・氏名を記入しなさい。
- 5 答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 6 字数制限のある問題については、かぎかっこ・句読点も一字と数えなさい。
- 7 文字はていねいに書きなさい。
- 8 質問や用があるときは静かに手をあげなさい。

一次の文章を読んで、後の間に答えなさい。

ヴィルケはもともとこの山国に生れたのだから、彼がどうしてそれほど冬を憎むようになったのか、誰にも分らなかつた。ただヴィルケに会つた人たちは、彼が寒さを呪ひ、冬のもたらすものを罵倒する言葉を始終聞かされる羽目になるのだつた。「ああ、たまらない、たまらない。この世に要らないものがあれば、それはまさしく冬だね。どうしてこの世はいつも春のように楽しくないのかね。春になれば草木もみどりになる。太陽も明るい。花だつて野山に咲き乱れる。だが、冬は死の季節だ。木も枯れ、草も枯れる。どこを見ても華やかな色なんてありはしない。そのうえまるで死んだこの世に経帷子きようかたひらを着せるように雪が白く覆つてしまふ。冬の長いこの国に生まれたのは俺の最大の不運だよ」村の人たちは1ヴィルケの愚痴ぐちはもう沢山たくさんだと思つたが、しかし氷を割つて水を汲んだり、手に霜焼けをつくつて労働しなければならぬとき、ふとヴィルケの言葉を思い出し、彼の言葉にも眞実はあると思うのだつた。

ヴィルケにとつて特に腹立たしかつたのは、冬になると山や森に獲物えものが沢山姿を見せることだつた。ヴィルケは獵師りやうし仲間とともに雪を踏んで獲物を追つたが、もしそれが太陽の明るく照る春だつたら、どんなに心がaオドるだろうと舌打ちしながら考えた。森の奥の仮り小屋で、焚火たきびをしながらbフブキをやりすごすような夜、寒さと焚火の煙でろくろく眠ることもできなかった。といつて、冬の季節をcナマけて暮すわけにはゆかなかつた。ヴィルケは口の中でぶつぶつ言いながら獵師仲間について森や谷を歩きまわつたのである。

そうしたある日、森の奥でヴィルケは見事な角をはやした牡鹿おしかを見つけた。ヴィルケは二人の仲間とともに鹿を追つた。鹿のほうも追われていることに気がつくつと、身を翻ひるがえして森の奥へ逃げた。たまたま領主が美しい鹿の角を求めていたので、それを仕留めれば莫大ばくだいな報酬ほうしゅうにありつくことは明らかだつた。ヴィルケと二人の仲間が夢中になつて鹿を追つたのはそのためである。

しかし半日ほど追跡した揚句あげく、ヴィルケたちはその牡鹿を見失つた。どこを捜しても足跡一つ見つけることはできなかった。

三人は夢から覚めたように辺りを見まわした。すでに日暮れが迫つていた。しかし山の形にも雪に覆われた樅もみの森にも見覚えがなかつた。そのときになつてヴィルケたちは、鹿を追うのに夢中になつていて、雪山の中で道を失つたことに気がついたのだつた。あたりには仮り小屋を作る場所もなく板ぎれ一つなかつた。犬たちも不安におびえ、時おり悲しげに遠吠とほほえした。雲行きもあやしく、夜のうちにフブキになりそうな気配だつた。三人は山の斜面を下り、最後の光が消えるまで、見知つた地形を捜そうと必死になつて歩きまわつた。そのうち容赦ようじやなく夜が黒く山々の上におりてきた。夜とともに風が吹きはじめ、峰々がごうごう音を立てて鳴つた。

ヴィルケの前を歩いていた他の二人の姿が、獵犬とともに突然見えなくなったのは、山の斜面を歩き尽そうとしている時であつた。一瞬、何が起つたのか、ヴィルケには理解できなかった。が、やがて、夜の底に白々と浮ぶ雪の斜面に大きな黒い穴があいているのが見えた。二人は獵犬たちとともに、その黒い穴から落ちたのであつた。おそらく雪が崖がけの上に庇ひさしのように突き出ている、誤つて二人はその足を踏み入れてしまつたに違ひなかつた。

しかしヴィルケはこの夜のなかではどうすることもできなかった。下手に動けば彼自身も谷に転落することになるだろう——ヴィルケはそう考えると、そろそろ雪の斜面を登り、安全と思われるあたり穴を掘つた。雪の洞窟ほらあなで一晩過そうと思つたのである。彼は冬を呪う言葉を口にも忘れた。

ていた。それほど不安が胸をしめつけていたのであった。

昼の狩りの疲れからヴィルケはうとうとと眠ったらしかた。ふと気がつくくと、どこかで犬が吠えていた。その声からみて、**2** 獵犬のエゾウに間違いなかった。

ヴィルケは急いで外に出てみたが、フブキの後、月が照っているだけで、エゾウの姿は見えなかった。どうやら雪の洞窟の壁の奥で声は聞こえていた。ヴィルケは夢中で声のするほうに雪の壁を掘っていた。犬の声は次第に近くなった。やがてあたりの雪が青白く燐光のように光りはじめ、間もなく、まるでトンネルの口がぼっかりあくように、ヴィルケは大きな広場に出たのであった。

エゾウは激しく尾を振りながらヴィルケに向って吠えつづけた。ヴィルケはエゾウをなだめながら、自分がどこに来たのかと訝いぶかった。そこにはすでに雪はなく、柔かな蒼白あおしろい光が漂い、昼と夜の間に似ていた。寒くもなく暑くもなかった。広場には憂鬱ゆううつな顔をした人々が佇たたくんでいた。散歩をする人も、ただ佇んでいるだけで自然と身体が移動しているような感じだった。

獵犬のエゾウはヴィルケの先に立ってしきりと尾を振っていた。そして一軒の家のドアの前で激しく吠え立てた。間もなくそのドアがあいて年とった女が姿を現わした。それを見るとヴィルケは思わず大声をあげて駆けよった。それはずっと昔に死んだ彼の母であった。

「おつ母さん、いったいこんなところでどうしているんです？ ずいぶんお久しぶりなのに少しも変っていませんね」

「お前こそどうしてこんなところに来たんだね」

ヴィルケは前の日からのことを母に物語った。

「お前はこんなところにはいけないよ。早く帰ったがいいよ」

「どうしてですか、おつ母さん、ここには雪も降ってなければ、凍てつく寒さもないじゃありませんか。こんなに居心地のいい場所は初めてですよ。いったいここはどこなんですか？」

「ここはみんなが〈あの世〉と呼んでいるところさ。お前のいうように凍てつく冬の寒さもなければ、日照りの夏の暑さもない。昼もなければ夜もない。ここには時間というものがないんだよ」

「なるほど、だからおつ母さんは年をとることがないんですね」

「ああ、向うの世界で言う意味では、ここじゃ誰も年をとらないよ」

「それは素晴らしいことじゃありませんか」

「お前はそう思うかね。でも、ここを歩いている人たちを見てごらん。みんなそう楽しそうな顔をしているように見えるかね」

「いいえ、そうは見えません。どうして憂鬱な顔をしているんです？ **3** こんな理想的な世界にいて」

「それはね、お前、ここでは昨日も今日も明日も全く変わりもなくただ時がつづいてゆくだけだからだよ。日も照らなければ雨も降らない。朝も来なければ、夕方になることもない。いつでも今と同じだよ。暑くも寒くもなく、明るくも暗くもない。こうやって一年たち二年たち十年たち百年たつ。お前には分るかね、全く動きもなく、ただ時が過ぎてゆくということが」

ヴィルケはおどろいて母の顔を見た。昔の母は、ヴィルケが悪戯いたずらをすれば悲しそうな顔をし、言うことを聴かないと叱ることもあったが、今よりずっと楽しそうに見えた。今は悩みごとはないかわりに楽しみもない様子だった。ヴィルケは母の顔を見てみると、百年も千年も何の変化もなくただ時がつづいてゆくというこの意味がおぼろげながら分ってくるような気がした。

「ねえ、お前」母は言った。「お前は気がついていないがね、春から夏になり、秋から冬になるってことが、どんなに人間を幸せにしているか、ここにいとよく分るんだよ。私は冬になって池の氷を割

つて水を汲んだり、湿った小枝に火をつけようとして燻る煙に眼をしよぼしよぼさせたり、泥水をはね上げる豚を押しつけて腹を裂いたりしたことが、今になると、まるで楽しい遊びであるかのように懐しく思い出されるんだよ。向うの世界にいたときには本当に辛いことと思っていたがね。ここから見ると、辛いなんてことはないんだよ。生きるつてことはね、何から何までみんないいことなのさ。病氣だつて、苦しみだつて、悩みだつて、それはお前、この死者たちの永遠に沈黙した世界から見るとね、生きていることの証しなんだよ。生きていることがどんなにいいことか、お前は、もう一度、向うの世界に戻つて、心の底から味わわなくてはいけないね」

「でも、おっ母さん、もう向うには帰れないんでしよう?」

「ただ一つ方法があるよ。ここに鏡があるからね、その中にお入り。お前が、鏡の中の自分のほうが本当の自分だ、と思えば、それでも鏡の中に入ることができるとだよ。そうしたら鏡をエゾウが生者の世界に運んでくれるからね。向うに着いたら、同じようにして、鏡の外に出られるはずだよ。死者の国でも生者の国でも、何でも信じていることが存在をつくりだすのだからね」

「でもエゾウはどうして向うへ帰ることができると?」

「そりゃ、お前、犬ほど素直に喜びに生きているものはないからね。お前がエゾウを猟に連れ出すとき、どんなにエゾウが喜ぶか、知っているだろう? エゾウが喜ぶのは報酬のためじゃないんだよ。ただそう、連れてつてもらうことが喜ぶんだよ。こういう存在だけが自由に生者の国にも死者の国にも行き来できるのさ」

4 ヴィルケが雪の洞窟で目を覚ましたとき、すでに朝の光が射していた。ヴィルケは手の中に小さな手鏡を握っているのに気がついた。エゾウは彼の傍に蹲っていた。

その日の午後、ようやく村に辿りついたヴィルケは仲間の猟師の救いを求めた。二人が奇跡的に助かったのはヴィルケのおかげだった。

二人の救助が祝われた日、ヴィルケは引き出しにしまった手鏡をさがした。しかし引き出しの奥には、手鏡はなく、鏡の形をしたしみが残っているだけだった。

「ああ、あれは鏡ではなく氷だったのだ」

ヴィルケはそう叫んだ。

外では女たちが火を焚いて祝宴の支度に忙しかった。ヴィルケはその火の色ほど暖かで美しいものを見たことがないと思つた。

(辻邦生「第四の旅 氷の鏡」『風の琴 二十四の絵の物語』所収)

問1 — 線 a、c のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 — 線 1 「ヴィルケの愚痴」とありますが、これは何に対してのものですか。文中より最もふさわしい部分を十字で抜き出しなさい。

問3 — 線 2 「猟犬のエゾウ」はどのように描かれていますか。次の中からふさわしいものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア ヴィルケとともに森の仮り小屋で眠り、その寂しさを紛らわせてくれた。

イ 賢い上に危険にも物怖じせず、ヴィルケとその母親を助けた。

ウ ヴィルケに母親の話を聞かせるために、そのもとへヴィルケを導いた。
エ 死者の国と生者の国を行き来して、ヴィルケの窮地を救ってくれた。
オ 生者の国ではヴィルケを助け、死者の国では彼の母親の道案内をする。
カ 鏡の国の死者たちを恐れないので、鏡の国でも喜んで生きていける。
キ ご褒美のためではなく、猟に連れて行ってもらうこと自体を喜びとしている。

問4 — 線3 「こんな理想的な世界」とありますが、これをヴィルケはどういう意味で言ったのですか。文中のことばを使い解答欄に合うように、二十字以内で書きなさい。

問5 — 線4 「ヴィルケが雪の洞窟で目を覚ました」とありますが、エゾウの助けを借りて、ヴィルケが帰ってこられたのはどうしてですか。次の「ア」「ウ」に本文中の最もふさわしいことばを入れることによつて答えなさい。ただし「ウ」については本文中より最もふさわしい部分を十七字で抜き出し、その初めの二字を書きなさい。

まずは、「ア」の自分の方が本当の自分だと思い、さらに「イ」の自分の方が本当の自分だと思ふことができたからであり、それは、「ウ」という言葉をヴィルケが実行に移したということである。

問6 〈あの世〉から帰つて来たヴィルケは、その経験からどういうことを学んだのですか。解答欄に合うように、三十字以上四十字以内で書きなさい。

二 小さい子はウソをつく時、相手が笑つてきている間はウソを話し続ける。信じてしまいそうになると、あわてて取り消そうとする。かつてウソは気軽な遊びであつたが、「ウソつきは泥棒のはじまり」などと言われるようになって、ウソが悪いことだとされてしまった。そのために、ウソが持つていた効用（よい働き）が失われた。

これらについて述べた、次の文章を読んで後の問に答えなさい。

一生の間にほとんど一回も、敵獣と闘うべき必要のない家の小犬までが、二匹以上集まれば咬み合ひの稽古ばかりしており、しかもこれをもつてただ一つの少年時代の遊戯としていのである。彼等の中でも、やはり少し遁げて相手に追わせてみたり、わざと倒れて下から噛んだり、武力に加味して若干の知恵を働かせているのを見かける。そうして1 こんな真剣でもない勝負から、若い者だけばかり大きな興味と昂奮とを、味わっているらしいのである。我々の家の子供には、相手の間違えたりまごついたりするのを見て、高笑いする子がよくある。2 実害のないのをほほ見定めてから、ひよいとウソをつこうとするなども性分であつて、無用な悪癖のように今では見られているが、昔はこれが必ずしも攻撃の場合だけでなく、自衛の法としてもぜひ必要な修業であつて、今でも私たちは最後の総決算の上から、小さいものにこの嗜好のあつたことを、社会の歴史としては幸福だつたと思つてゐる。もちろん弓や刃物があぶないと同様に、この技術にも折々の濫用があつた。敵でもない者がこ

れによつて傷つき、もしくはあまりに敵が少なくなつたために仲間の誰かを敵にして、**3 真剣を試みる者が稀にはあつた。**しかしそんな懸念があるために、総括してこれを制止しようとするのは近頃のこと、以前は土俵を作つて角力を取らせ、あずちを設けて弓を射させ、老若男女がこれを見物したように、この面白い知恵の試合をさせて、ともどもにこれを笑つていたもので、つまりウソという閑東の方言は、一種剣術でいうならば、お面やお籠手のとき技術の名称であつたのである。

ウソがこうして競技の一つとなつた以上は、またこの道の名人上手ができるのも当然で、そのために評判はますます高く、天分ある者の才能はおいおいにこれに向つて傾注せられ、末にはわざわざあの男にならば、すこしばかり騙されてみたいといふところまで進んだ、人に重んぜられる芸術となつたようだが、その代りに実用の方とはだんだん縁が遠くなつたことは、これもまた今日のスポーツなどと同じである。童話の中には奥州一番のウソツキがあつて、京から京一番のウソツキが、ウソ競べにやつて来て通げて還つたなどというのがあるが、そういう昔話のウソは、たいていはいかなる愚か者をも、騙すことのできぬようなものばかりであつた。以前は村々には評判のウソツキという老人などが、たいていは一人ずつ住んでいて、たとえば十返舎一九の最期の花火線香のように、死んだ後までもその逸話をもつて、永く土地の住民を大笑いさせている。その中にはあるいは『猿蓑』の俳諧に出て来るような、いわゆるまことらしきウソをつく者も少しはあつたろうが、そのウソがわかれば馬鹿にされ、まに受けさせれば人が怒つて、とうてい十分の人望を博することはできなかつた。人望のあるウソは必ず話になつていく。むつかしい語で申せばもう **X** 化している。おやと思つて聴いているうちに、すぐにウソと解つておかしくなるもの、または最初から思いもよらぬ奇抜なことを、おれが若い頃などに言つて談るのだから、聴衆の方でもいたつて心安く、その技術を鑑賞することができたので、これがなかつたら我々の文学は、今日のように愉快に発達することができなかつたのである。

実際またウソ修行の昔話にもあるように、多勢の中にはこの技術をもつて**4 立身した者**もあつた。太閤秀吉の寵を受けた(かわいがられた)という曾呂利新左衛門などはその一人で、昔は咄の者とも名づけて大名たちが、そういう名人のウソツキを抱えていた時代がある。これなどは実は見かけによらず骨の折れる職務であつた。同じ話で人は二度は笑わぬから、始終新しい種を貯えておかねばならぬ。それを聴く人がウソと看破しうる(見やぶれる)程度に、しかもまことしやかに語らなければならぬ。つたのである。太閤が諸士に酒を禁じて、酒のために不興を蒙る者が多かつた頃、曾呂利だか誰だか真赤な顔をして御前に出て来た者があつた。その方は酒を飲んで来たか。イヤあまり今朝は寒いので、焚火をして当つて参りました。ウソをつけ、おれが嗅いでみようこれへ出え。いやこれは樽柿くさい。飲んで来たに相違ないという、さようでござりましょう。柿の木を焚いて当りましたから。こういうウソは**5 太閤ならばたいは笑う。**が万一慧敏でない大名に向つてついたら、馬鹿にするなど言つて必ずやお手討であつたらう。この加減がひどくむつかしかったのである。

(松田哲夫編『中学生までに読んでおきたい哲学』③うその楽しみ 柳田国男「ウソと子供」)

問1 — 線1「こんな真剣でもない勝負」とありますが、これを筆者はどのようなものとして見ていますか。本文の中にある次の語句の中から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 修業 イ 悪癖 ウ 自衛 エ 才能 オ 幸福

問2 — 線2 「実害のないのをほぼ見定めてから、ひよいとウソをつこうとする」とありますが、それとは逆に「実害」のあるウソとはどのようなものですか。文中から八字で抜き出しなさい。

問3 — 線3 「真剣を試みる者が稀にはあった」とありますが、それをやめさせるためにもうけたものは何ですか。文中から最もふさわしい部分を五字で抜き出しなさい。

問4 X に最もふさわしい語を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 実用 イ 現実 ウ 文芸 エ 競技 オ 無用

問5 — 線4 「立身した者」とありますが、それはどのような役目をしていた人ですか。その内容を文中のことはを使って解答欄に合うように、三十五字以上四十字以内で書きなさい。

問6 — 線5に「太閤」は「笑う」とありますが、それはなぜですか。その理由の説明としてふさわしいものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア 禁じられていた酒を飲んで来たにもかかわらず、飲んでいないとしらを切り続ける曾呂利の態度が太閤にはおもしろかったから。

イ 酒を飲むことが禁じられている中、太閤から不興をこうむった人のために、飲んでもいないのに飲んで駆けつけましたと曾呂利があえてウソをついたから。

ウ 酒臭いと太閤にとがめられたところ、柿の木を焚いた火に当たって匂いがついたからだと言呂利がすばやく答えただから。

エ 酒を飲めない曾呂利は柿の木を焚いた火に当たり、熟した柿のような真っ赤な顔をして太閤の前にまかり出て、堂々とした態度を見せたから。

オ 酒を飲んで来たにもかかわらず、酒の匂いにするのは香りの強い樽柿を食べたせいだと曾呂利が答えたのを、太閤は上手なウソと見破ったから。

カ 禁酒が命じられているにもかかわらず、真っ赤な顔をして御前に出て来た曾呂利の機知に富んだウソを、太閤はよくわかつているから。

問7 この文章から読み取れる〈ウソの効用〉とはどういうことですか。その内容を説明するものとしてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 聴衆がウソの技術を鑑賞し、おもしろがるようになったということ。

イ 太閤が巧みなウソをほめ、酒の戒めを解いたということ。

ウ 今日の文学に受け継がれる愉快な文学が生まれたということ。

エ ウソを、よりおもしろがる村が生まれたということ。

「以下 余白」

